

[駒沢女子大学 研究紀要 第17号 p.23 ~ 37 2010]

失業者に対する意識 —失業者との関係性に着目した KJ 法による分析—

石津 和子*, 高橋 美保**, 森田 慎一郎***

Consciousness for the Unemployed
—The Classification of the Image by the KJ Method
Focusing the Reference to the Unemployed—

Kazuko ISHIZU*, Miho TAKAHASHI**, Shinichiro MORITA***

キーワード：失業者、ステイグマ、KJ 法

Key words : unemployed people, stigma, KJ method

Abstract

Unemployment is one of the big social problems and that can become a stressful experience for the individual. It is suggested that prejudice and stigmas for unemployed people may be related to the difficulties of the unemployed. The purpose of this study is to investigate what kind of image, impression and consciousness to the unemployed were hold in general. In addition, the references to the unemployed were analyzed, because it was supposed that the references might represent their consciousness.

As a result of analysis by the KJ method, the consciousness for the unemployed consisted of 9 categories and that the general image of unemployed people influences evaluation to the unemployed person, correspondence and the feeling of the unemployed person. The results showed that self-evaluation of the unemployed influenced the psychological problem of the unemployed people than the evaluation by their family and the friend. A better support for unemployed people was discussed.

問題

失業は社会問題であると同時に、失業した個人にとってもストレスフルな体験となりえる。高橋（2008）は、失業者は、失業によって会社

生活を喪失するばかりか、社会そのものからの排除と孤立を体験し、社会とのつながりを失うことを示唆し、失業者の生きにくさには、失業者への偏見やステイグマが関係している可能性

* 駒沢女子大学 人文学部 人間関係学科

** 東京大学大学院 教育学研究科

*** 武蔵野大学 通信教育部

を指摘した。このことから、一般の市民や失業者自身が失業者に対してどのような意識を持っているのかが、失業者の精神健康に影響を及ぼす可能性があると考えられる。

そこで、本研究は、失業者の生きにくさの要因の一つとして、失業者に対する意識に注目し、その実態を明らかにすることを目的に、以下3つのリサーチクエスチョン（以下、RQと略記する）を立てて実施された。

1つ目のRQは、一般に失業者についてどのようなイメージや印象、意識が抱かれているのかを明らかにすることである。Goffman (1963) や Dovidio ら (2000) は、ともにある属性や特徴はそのものが問題なのではなく、その属性や特徴が文化や歴史、価値観といった、より広い文化的背景やその人が置かれた状況などのある具体的な文脈の中でどのように意味づけられるかが重要であるとした。失業に置き換えるならば、失業をしていること自体が問題なのではなく、人は当然働いているべきである、という社会的・文化的価値観を有する文脈において、働いていないことが問題となると考えられる。そこで、本研究は、第1のRQとして、失業者を取り巻く社会的・文化的文脈を理解することを目的に想定する失業者を限定せず広く失業者についての意識を明らかにすることとした。

ただし、失業者として誰を想定するかによって、失業者への意識が異なることが予測される。失業については、Furaker and Blomsterberg (2003) は、自分自身も失業経験がある人、自分自身も失業する可能性があると思っている人、家族や身近な友人に失業経験がある人は失業者を非難する傾向がより低いことを見出した。そこで、第2のRQでは、失業者として、他人、身近な人、自分を想定してもらい、想定する失業者との関係性別に、失業者に対する意識の傾向を明らかにすることを目的とした。

また、第3のRQでは、失業者の生きにくさの要因として失業者のセルフ・スティグマについて検討した。自分自身が持つスティグマはセルフ・スティグマ (Self-Stigma) と呼ばれ、諸外国では、さまざまな精神疾患について、セルフ・スティグマが回復の重大な妨害要因となることが指摘されてきている (下津・堀川・坂本・坂野、2005)。

スティグマの性質や程度に影響する条件としては、可視性、方向、阻害性、審美的な質、原因 (制御可能性)、危険性、が指摘され、最近では、制御可能性や可視性が着目されている (Jones ら、1984; Dovidio ら、2000; Crocker ら、1998)。失業者に置き換えるならば、例えば、原因 (自己都合か会社都合かなど) や可視性 (失業しているか) は一様でなく、失業者は一括りにはしがたいと考えられる。にも関わらず、失業者が生きにくさを抱えているならば、むしろ失業者が自分自身に対してどのような意識を抱いているかを知ることが重要になると考えられる。高橋 (2010) は、失業者が「社会の目」を内在化し、罪や恥の意識を抱いていると指摘している。そこで3つ目のRQでは、失業者が自らに対して抱くスティグマ意識について検討することを目的に、自身を失業者として想定した場合に、失業者である自分に対して、他者、つまり、地域の人や、家族・友人、雇用者がどのような意識を抱くと想像するかについて検討することとした。

方法

手続：2009年12月－2010年1月に、著者らが直接あるいは知人を通して配布し、直接あるいは後日郵送で回収した。調査を始める前に、調査の目的と意義、調査内容の概略、データの取り扱いと守秘義務、任意で回答を求めることを伝え、理解を確認し、協力の意思が得られた場合

に、任意で回答を求めた。181部配布、145部回収し（回収率80.11%）、すべて分析対象とした（有効回答率100%）。

対象者：学生・大学院生94名、会社員（総合職・一般職・専門職・カウンセラー）28名、公務員（団体含む）4名、自営業2名、専業主婦5名、パート4名、失業中2名、無職2名、その他1名、不明3名（男性36名、女性109名、平均年齢=30.02歳、SD=13.56）。

調査内容：失業者への意識調査として、以下、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3つの項目群からなる自由記述式質問紙調査を行った。項目群は3つのRQに対応している。まず、Ⅰでは、失業者との関係性についての教示を行わずに、失業者に対するイメージや印象、感情及び態度と行動を尋ねた。次に、Ⅱでは、想定する失業者との関係性別に、失業者への意識を尋ねた。具体的には、失業者として、Ⅱ-1 他人（新聞やニュースからイメージする失業者）、Ⅱ-2 身近な人（身の周りにいる友人、家族、知り合いなどで失業している失業者）、Ⅱ-3 自分（“自分”が今失業者であると想像して、あるいは自らの失業経験を想定してもらい、失業者に対するイメージや印象、感情及び態度と行動を尋ねた。最後に、Ⅲでは、Ⅱ-3の失業者として自分を想定した場合について、他者、つまり、Ⅲ-1 家族、Ⅲ-2 友人、Ⅲ-3 地域の人、Ⅲ-4 雇用者が、失業者である自分に対して抱くイメージや印象、感情及び態度と行動を尋ねた。

以下では、3つのRQに基づいて、失業者との関係性を軸に、失業者に対する意識、想定する関係別の失業者に対する意識、セルフ・ステイグマという3点について、順に分析し結果と考察を提示する。

（1）失業者に対する意識

分析

著者ら3名、及び臨床心理学専攻の修士1名がKJ法（川喜田、1970）により自由記述の内容を分類・カウントし、イメージの内容と傾向を明らかにした。

KJ法の分析手順は次のとおりである。①まずは、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの全質問項目に対する回答を記述データとし、全記述データを、意味の単位毎に区切り、要約してカードに書き出した。②記述データをカード化したものを、内容の類似性により一時的にまとめグループを編成した。次に、同様にまとめた他のグループと比較し、他のまとめ方はないか検討し、最後に問題がないと思われたグループに表札をつけてまとめた（カテゴリの編成）。③さらにグループの表札を見比べて親近性のあるものを集め、タイトルをつける作業を繰り返した（中カテゴリ・大カテゴリの編成）。分類にあたって迷ったカテゴリは筆者らで協議し、さらに臨床心理学専攻の修士1名に分類を行ってもらうことで、客観性を高める手続きとした。

なお、「失業者に対する意識」の分析では、失業者に対する意識の傾向を明らかにするために、Ⅰ-Ⅲ全ての質問項目に対する回答をデータとして、カテゴリのカウントを行い、その傾向を検討した。

結果と考察

カテゴリ化の結果、失業者に対する意識は、9つの大カテゴリにまとめられた。失業者に対する意識のカテゴリの総数は、2370であった（内訳は表1の全体の列の記述数と%に示す。）記述数は、「H 失業者への対応（524、22.11%）」「G 失業者への情緒的反応（437、18.44%）」「I 失業者の心理（434、18.31%）」「F 失業者の社会的距離・社会的関係（281、11.86%）」「B 失業者へのネガティブ評価（201、8.48%）」「D 失業

表1 失業者に対する意識

大カテゴリ・中カテゴリ	カテゴリ	具体的な記述例	全体		他人		身近な人		自分		想定別計	
			記述数	%	記述数	%	記述数	%	記述数	%	記述数	%
A 失業者へのポジティブ評価	A-1人物に対するポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	47	1.98	17	1.09	9	0.58	7	0.45	33	2.12
	A-2就職活動のポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	29	1.22	12	0.77	6	0.38	0	0.00	18	1.15
B 失業者へのネガティブ評価	B-1元々の能力不足	『就職活動へのまじめな取り組み』	18	0.76	5	0.32	3	0.19	7	0.45	15	0.96
	B-2就職活動への疑問	『就職活動へのまじめな取り組み』	1	0.04	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
C 失業による学び	C-1弱者の視点の獲得	『弱者の支援の獲得』	17	0.72	5	0.32	3	0.19	7	0.45	15	0.96
	C-2思索の深まり	『仕事や人生についてより深く考える』	201	8.48	69	4.43	52	3.34	9	0.58	130	8.34
D 失業への対処	D-1失業の困難への対処	『失業の困難への対処』	114	4.81	32	2.05	21	1.35	6	0.38	59	3.78
	D-2失業に対する生活面の対処	『失業の困難への対処』	66	2.78	18	1.15	12	0.77	4	0.26	34	2.18
E 生活の厳しさ	E-1生活の困窮	『生活の困窮』	11	0.46	5	0.32	2	0.13	0	0.00	7	0.45
	E-2生活の崩壊	『ホームレスのイメージ』	37	1.56	9	0.58	7	0.45	2	0.13	18	1.15
A 失業者へのポジティブ評価	A-1人物に対するポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	47	1.98	17	1.09	9	0.58	7	0.45	33	2.12
	A-2就職活動のポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	29	1.22	12	0.77	6	0.38	0	0.00	18	1.15
B 失業者へのネガティブ評価	B-1元々の能力不足	『仕事的能力的な問題（前職での問題行動・パフォーマンスの低さ（実績）、仕事の能力のなさ（学歴、精神障害、身元不明含む）』	66	2.78	18	1.15	12	0.77	4	0.26	34	2.18
	B-2就職活動への疑問	『働き方の問題』	11	0.46	5	0.32	2	0.13	0	0.00	7	0.45
C 失業による学び	C-1弱者の視点の獲得	『弱者の支援の獲得』	8	0.34	0	0.00	0	0.00	8	0.51	8	0.51
	C-2思索の深まり	『仕事や人生についてより深く考える』	38	1.60	2	0.13	3	0.19	32	2.05	37	2.37
D 失業への対処	D-1失業の困難への対処	『失業の困難への対処』	5	0.21	0	0.00	0	0.00	4	0.26	4	0.26
	D-2失業に対する生活面の対処	『失業の困難への対処』	12	0.51	4	0.26	3	0.19	4	0.26	11	0.71
E 生活の厳しさ	E-1生活の困窮	『生活の困窮』	23	0.97	0	0.00	3	0.19	20	1.28	23	1.48
	E-2生活の崩壊	『ホームレスのイメージ』	37	1.56	12	0.77	0	0.00	1	0.06	13	0.83
A 失業者へのポジティブ評価	A-1人物に対するポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	47	1.98	17	1.09	9	0.58	7	0.45	33	2.12
	A-2就職活動のポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	29	1.22	12	0.77	6	0.38	0	0.00	18	1.15
B 失業者へのネガティブ評価	B-1元々の能力不足	『仕事的能力的な問題（前職での問題行動・パフォーマンスの低さ（実績）、仕事の能力のなさ（学歴、精神障害、身元不明含む）』	66	2.78	18	1.15	12	0.77	4	0.26	34	2.18
	B-2就職活動への疑問	『働き方の問題』	11	0.46	5	0.32	2	0.13	0	0.00	7	0.45
C 失業による学び	C-1弱者の視点の獲得	『弱者の支援の獲得』	8	0.34	0	0.00	0	0.00	8	0.51	8	0.51
	C-2思索の深まり	『仕事や人生についてより深く考える』	38	1.60	2	0.13	3	0.19	32	2.05	37	2.37
D 失業への対処	D-1失業の困難への対処	『失業の困難への対処』	5	0.21	0	0.00	0	0.00	4	0.26	4	0.26
	D-2失業に対する生活面の対処	『失業の困難への対処』	12	0.51	4	0.26	3	0.19	4	0.26	11	0.71
E 生活の厳しさ	E-1生活の困窮	『生活の困窮』	23	0.97	0	0.00	3	0.19	20	1.28	23	1.48
	E-2生活の崩壊	『ホームレスのイメージ』	37	1.56	12	0.77	0	0.00	1	0.06	13	0.83
A 失業者へのポジティブ評価	A-1人物に対するポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	47	1.98	17	1.09	9	0.58	7	0.45	33	2.12
	A-2就職活動のポジティブ評価	『元々のその人の仕事能力・実績・特性』	29	1.22	12	0.77	6	0.38	0	0.00	18	1.15
B 失業者へのネガティブ評価	B-1元々の能力不足	『仕事的能力的な問題（前職での問題行動・パフォーマンスの低さ（実績）、仕事の能力のなさ（学歴、精神障害、身元不明含む）』	66	2.78	18	1.15	12	0.77	4	0.26	34	2.18
	B-2就職活動への疑問	『働き方の問題』	11	0.46	5	0.32	2	0.13	0	0.00	7	0.45
C 失業による学び	C-1弱者の視点の獲得	『弱者の支援の獲得』	8	0.34	0	0.00	0	0.00	8	0.51	8	0.51
	C-2思索の深まり	『仕事や人生についてより深く考える』	38	1.60	2	0.13	3	0.19	32	2.05	37	2.37
D 失業への対処	D-1失業の困難への対処	『失業の困難への対処』	5	0.21	0	0.00	0	0.00	4	0.26	4	0.26
	D-2失業に対する生活面の対処	『失業の困難への対処』	12	0.51	4	0.26	3	0.19	4	0.26	11	0.71
E 生活の厳しさ	E-1生活の困窮	『生活の困窮』	23	0.97	0	0.00	3	0.19	20	1.28	23	1.48
	E-2生活の崩壊	『ホームレスのイメージ』	37	1.56	12	0.77	0	0.00	1	0.06	13	0.83

大カテゴリ・中カテゴリ	カテゴリ	具体的記述例	全体		他人		身近な人		自分		想定別計	
			記述数	%	記述数	%	記述数	%	記述数	%	記述数	%
F 失業者の社会的距離・社会的関係			281	11.86	72	4.62	17	1.09	57	3.66	146	9.36
F-1社会との距離の増大			108	4.56	24	1.54	1	0.06	39	2.50	64	4.11
	『他人事』	自分はそうはならない、無関係、無関心	59	2.49	23	1.48	1	0.06	1	0.06	25	1.60
	『社会からの回避行動』	知り合いに会わないようにする、自宅にいる、人に会いたくない	30	1.27	1	0.06	0	0.00	24	1.54	25	1.60
	『肩身の狭い思い・卑屈な気持ち』	他者の資源が気になる、こそこそする、実情は話さない	19	0.80	0	0.00	0	0.00	14	0.90	14	0.90
F-2社会からの排除			155	6.54	42	2.69	15	0.96	12	0.77	69	4.43
	『社会からの切り捨て』	いらないと言われた人、はじき出された人、友人関係崩れる	19	0.80	7	0.45	0	0.00	5	0.32	12	0.77
	『失業者への蔑視』	白い目で見える、見下す、軽蔑する、嘲笑う	47	1.98	5	0.32	4	0.26	0	0.00	9	0.58
	『社会からの排他的態度』	近づきたくない、関わらない、冷淡、無視する、防壁、疎遠、噂話、距離を置く	43	1.81	14	0.90	6	0.38	1	0.06	21	1.35
	『再就職の困難』	再就職が難しい、同じ条件ではない	46	1.94	16	1.03	5	0.32	6	0.38	27	1.73
F-3社会からの孤立・除外			18	0.76	6	0.38	1	0.06	6	0.38	13	0.83
	『社会からの孤立・除外』	孤立、孤独、疎外感、差別、荒波からはくれる、時代の波についていけない、社会生活からの排除	12	0.51	3	0.19	0	0.00	6	0.38	9	0.58
	『社会で生かされない葛藤』	人材が活用されていない、スキルはあるが発揮できない、就活がうまくいかないジレンマ	6	0.25	3	0.19	1	0.06	0	0.00	4	0.26
G 失業者への情緒的反応			437	18.44	212	13.60	48	3.08	3	0.19	263	16.87
G-1共感・同情的な理解			375	15.82	198	12.70	46	2.95	2	0.13	246	15.78
	『共感的な反応』	かわいそう、気の毒、大変そう、つらそう	212	8.95	114	7.31	25	1.60	0	0.00	139	8.92
	『同情的な理解』	不運、本人のせいではない、同情、明日は我が身	71	3.00	38	2.44	10	0.64	0	0.00	48	3.08
	『社会の犠牲者』	社会・時代の流れ、世の中に翻弄	67	2.83	30	1.92	10	0.64	1	0.06	41	2.63
	『会社の犠牲者』	会社の都合に振り回される、会社の犠牲	25	1.05	16	1.03	1	0.06	1	0.06	18	1.15
G-2失業者に対するネガティブなイメージ			62	2.62	14	0.90	2	0.13	1	0.06	17	1.09
	『否定的な反応』	惨め、憐れ	22	0.93	1	0.06	1	0.06	0	0.00	2	0.13
	『敗北者のイメージ』	落伍者、敗北者、負け組、喪失感、社会的弱者、暗い	20	0.84	1	0.06	1	0.06	1	0.06	3	0.19
	『忌避的な反応』	自分でなくてよかった、自分はなりたくない	20	0.84	12	0.77	0	0.00	0	0.00	12	0.77
H 失業者への対処			524	22.11	151	9.69	131	8.40	8	0.51	290	18.60
H-1失業者へのポジティブな対処			418	17.64	135	8.66	107	6.86	8	0.51	250	16.04
	『失業者に対する寛容な態度』	慰める、気を使う、優しく接する、理解する、信じる	83	3.50	17	1.09	14	0.90	1	0.06	32	2.05
	『応援する』	頑張ってほしい、応援する励ます、相談に乗る	244	10.30	79	5.07	69	4.43	1	0.06	149	9.56
	『無力感』	何もできない、早く気付いてほしい、見守る、何もしない	91	3.84	39	2.50	24	1.54	6	0.38	69	4.43
H-2失業者へのネガティブな対応			88	3.71	10	0.64	15	0.96	0	0.00	25	1.60
	『失業者への厳しい態度』	諦める、叱責する	41	1.73	0	0.00	3	0.19	0	0.00	3	0.19
	『不審感・好奇心』	不審に思う、どうしたのか、なぜ離職したのか	47	1.98	4	0.26	3	0.19	0	0.00	7	0.45
H-3サポートについて			18	0.76	6	0.38	9	0.58	0	0.00	15	0.96
	『サポートについて』	キャリア教育の充実、職業訓練の問題、メンタルサポートの必要、おごる	18	0.76	6	0.38	9	0.58	0	0.00	15	0.96
I 失業者の心理			434	18.31	23	1.48	10	0.64	296	18.99	329	21.10
I-1失業への反応			230	9.70	20	1.28	6	0.38	138	8.85	164	10.52
	『直後の戸惑い』	何をしたらよいか、どうするか、驚き、戸惑い	21	0.89	1	0.06	1	0.06	15	0.96	17	1.09
	『ショック反応』	ショック、傷つく、落ち込む	17	0.72	2	0.13	0	0.00	8	0.51	10	0.64
	『困惑反応』	悩む、困る、不安、心配	88	3.71	8	0.51	0	0.00	44	2.82	52	3.34
	『受け入れがたさ』	無念、悔しさ、不条理感、受け入れがたさ	11	0.46	0	0.00	1	0.06	9	0.58	10	0.64
	『時間的展望のなさ』	見通しが立たない、先行き不安	52	2.19	5	0.32	3	0.19	38	2.44	46	2.95
	『失業の受容』	聞き直る、正当化する、納得しようとする、仕方ない	22	0.93	1	0.06	1	0.06	8	0.51	10	0.64
	『社会への怒り・不信心』	だれかの所為にする、働いている人への怒り、信用できない	19	0.80	3	0.19	0	0.00	16	1.03	19	1.22
I-2自分に対するネガティブなイメージ			153	6.46	2	0.13	1	0.06	124	7.95	127	8.15
	『自己評価の低下』	無力感、劣等感、卑屈になる、絶望感、挫折感	96	4.05	2	0.13	1	0.06	84	5.39	87	5.58
	『自尊心・罪悪感』	自分を責める、追い込む、後ろめたい、情けない、申し訳ない	51	2.15	0	0.00	0	0.00	36	2.31	36	2.31
	『羞恥心』	みっともない、恥ずかしい	6	0.25	0	0.00	0	0.00	4	0.26	4	0.26
I-3精神状態の悪化			35	1.48	1	0.06	3	0.19	21	1.35	25	1.60
	『精神的な落ち込み』	精神的にうつになる、自殺願望、生きるのが辛い、自暴自棄、悲観的、消極的、希望がない	32	1.35	1	0.06	3	0.19	20	1.28	24	1.54
	『元気でいられない』	笑顔で話せない、不健康、元気にふるまえない	3	0.13	0	0.00	0	0.00	1	0.06	1	0.06
I-4楽観視			16	0.68	0	0.00	0	0.00	13	0.83	13	0.83
	『楽観的』	どうにかなる、深刻ではない、心配ない、焦らなくてよい	16	0.68	0	0.00	0	0.00	13	0.83	13	0.83
合計			2370	100	586	37.59	287	18.41	686	43.17	1559	100

への対処(191,8.06%)」「C 失業による学び(129,5.44%)」「E 生活の厳しさ(126,5.32%)」「A 失業者へのポジティブ評価(47,1.98%)」の順に多かった。以下、それぞれのカテゴリ数や内容から、失業者に対する一般の意識について検討する。

なお、表1中の、A～Iは大カテゴリ、A-1～I-4は中カテゴリ、『』はカテゴリを示しており、文中の「」は中カテゴリ、『』はカテゴリを示している。

A. 失業者に対するポジティブ評価

失業者に対するポジティブ評価は47(1.98%)と、全体で最も少ない記述数であった。内容は、『元々のその人の仕事能力・実績・特性』を含む「人物についてのポジティブ評価」と、『就職活動へのまじめな取り組み』『働く意欲の十分さ』を含む「就職活動へのポジティブ評価」の2つにまとめられ、「人物に対するポジティブ評価」が「就職活動のポジティブ評価」をやや上回った。

B. 失業者に対するネガティブ評価

一方、失業者に対するネガティブ評価は、201(8.48%)と、全体で5番目に多かった。内容は、『仕事の能力的な問題(前職での問題行動・パフォーマンスの低さ、仕事の能力のなさ(学歴、精神障害、身元不明含む))』、『生き方の問題』、『人格の問題(ふまじめ、人間関係が下手、家族を養う能力がない、甘えている)]を含む「元々の能力不足」、『努力不足』『就職活動への疑問・疑念』『選択の問題』を含む「就職活動への疑問」の2つにまとめられ、「元々の能力不足」が「就職活動への疑問」をやや上回った。

ポジティブ評価と比較すると、「元々の能力不足」では、仕事の能力や実績、人格特性に加え、出自や学歴に至るより幅広い点について負

の評価がなされ、「就職活動への疑問」では、活動への取り組みや意欲に加え、職業の選択という本来誰もがもつ権利に至るまで、負の評価がなされていることが窺われた。

C. 失業による学び

失業による学びは、129(5.44%)と、全体で7番目に多かった。内容は、『仕事や人生についてより深く考える』『自分と向き合う』などを含む「思索の深まり」と、『失業のポジティブな意味付け』『今後の失業に向けての事前対策』を含む「失業の積極的な意味づけ」、「弱者の視点の獲得」の3つにまとめられ、「思索の深まり」と「失業の積極的な意味づけ」が、それぞれ約2.5%で大半を占めた。

D. 失業への対処

失業への対処は、191(8.06%)であり、全体で6番目に多かった。内容は、『就職活動への前向きな取り組み』や『なりふり構わぬ前向きな就職活動』などを含む「就職活動へのポジティブな取り組み」、『経済的工面』『優雅に過ごす』を含む「失業に対する生活面の対処」、『失業の困難への対処』『社会システムの問題視』を含む「失業の困難への対処」、「他者との協働」、「回避的対処」の5つにまとめられ、「就職活動へのポジティブな取り組み(124,5.23%)」を始めとした能動的対処が大半を占め、「回避的対処」は、14(0.59%)と少数に留まった。

E. 生活の厳しさ

生活の厳しさは、126(5.32%)と全体で8番目に多く、内容は、『生活の困窮』『貧困』を含む「生活の困窮」と、『すさんだ生活』『ホームレスのイメージ』『家庭崩壊』を含む「生活の崩壊」の2つにまとめられた。「生活の困窮」と「生活の崩壊」は、ほぼ同数であった。

F. 社会的距離の増大・社会的関係

失業者の社会的距離の増大・社会的関係は、281(11.86%)と、全体で4番目に多かった。

内容は、『社会からの回避行動』『肩身の狭い思い・卑屈な気持ち』を含む「社会との距離の増大」、『社会からの切り捨て』『失業者への蔑視』などを含む「社会からの排除」、『社会からの孤立・疎外』『社会で生かされない葛藤』の3つにまとめられ、「社会からの排除（155、6.54%）」と「社会との距離の増大（108、4.56%）」が大半を占めた。ここから、失業者が社会から排除されるとともに、失業者自身が社会との距離を取る様子がイメージされていることが窺われた。

G. 失業者への情緒的反応

失業者への情緒的反応は、437（18.44%）と全体で2番目に多かった。内容は、『共感的な反応』『同情的な理解』などを含む「共感・同情的な理解」と、『否定的な反応』『敗北的なイメージ』などを含む「失業者に対するネガティブなイメージ」の2つにまとめられ、「共感・同情的な理解」が212（15.82%）と大半を占めた。

H. 失業者への対応

失業者への対応は、524（22.11%）と最も多かった。内容は、『失業者に対する寛容な態度』『応援する』を含む「失業者へのポジティブな対応」、職業教育やキャリア教育の必要性を指摘する「サポートについて」、『失業者への厳しい態度』『不審感・好奇心』などの「失業者へのネガティブな対応」の3つにまとめられ、「失業者へのポジティブな対応（418、17.64%）」が大半を占めた。ただし「失業者へのネガティブな対応」が、88（3.71%）と少ないながら見られた点については、要因を検討する必要があると考えられた。

I. 失業者の心理

失業者の心理は、434（18.31%）と、全体で3番目に多かった。内容は、『直後のとまどい』『ショック反応』などを含む「失業への反応」、『自己評価の低下』『自責感・罪悪感』などを含む「自分に対するネガティブなイメージ」、『精神的な

落ち込み』『元気でいられない』を含む「精神状態の悪化」、『楽観視』の4つにまとめられた。記述数は、失業したことへのいわば自然な反応と考えられる「失業への反応（230、9.7%）」が最も多かったものの、「自分に対するネガティブなイメージ（153、6.46%）」と「精神状態の悪化（35、1.48%）」が少なからず見られたことから、失業者は、失業による直接的なショックだけでなく、自己イメージを低下させ、結果として、失業という事態への反応以上に、精神状態にダメージを受けている可能性があると考えられた。

以上、KJ法の結果、失業者への意識は9つに大別され、多様性をもつことが明らかになった。記述数と内容の検討から、失業者への意識は、ポジティブな情緒的反応・対応が大半を占める一方で、心理状態の悪化や生活の厳しさといったネガティブなイメージも想起されていることが示された。イメージの多様性には、失業者との関係性が関連した可能性があると考えられたことから、以下では関係性別に失業者に対する意識について検討した。

(2) 想定した失業者との関係性別の失業者に対する意識

分析

次に、2つ目のRQである想定する失業者との関係性別の失業者に対する意識を検討するために、2つ目の質問群、すなわち、失業者として、Ⅱ-1他人（新聞やニュースからイメージする失業者）、Ⅱ-2身近な人（身の周りにいる友人、家族、知り合いなどで失業している失業者）、Ⅱ-3自分（“自分”が今失業者であると想像して、あるいは自らの失業経験を想定してもらい、失業者に対するイメージや印象、失業者に対する感情及び態度と行動を尋ねた質問項目に対するカテゴリをデータとして用いて

分析した。

分析としては、想定する失業者との関係性別に、カテゴリのカウントを行い、関係性によって、カテゴリの出現頻度や内容がどのようなものであるかを検討した。

結果と考察

カウントの結果、関係性別の質問項目に対して得られた、カテゴリの総数は、1559であった（結果を、表1の“他人”、“身近な人”、“自分”、想定別計の列の記述数と％に示す。）なお、表1の全体は、質問項目Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの合計であり、想定別計は、Ⅱ-1、Ⅱ-2、Ⅱ-3の合計であるため、全体と想定別計は一致しない。

記述数は、全体では、“自分”（686、44.00%）、“他人”（586、37.59%）、“身近な人”（287、18.41%）の順に多かった。想定別には、“他人”を想定した場合は「G失業者への情緒的反応」が212（13.60%）と最も多く、「H失業者への対応（151、9.69%）」「F失業者の社会的距離・社会的関係（72、4.62%）」と続いた。“身近な人”を想定した場合は「H失業者への対応」が131（8.40%）と最も多く、「B失業者へのネガティブ評価（52、3.34%）」「G失業者への情緒的反応（46、2.95%）」と続いた。“自分”を想定した場合は「I失業者の心理」が296（18.99%）と最も多く、「D失業への対処（177、11.35%）」「C失業による学び（114、7.31%）」と続いた（表1参照）。以下、カテゴリ数や内容の分析から、想定する関係性別の失業者に対する意識を詳細に検討する。

A. 失業者に対するポジティブ評価

失業者に対するポジティブ評価は、“他人”（17、1.09%）、“身近な人”（9、0.58%）、“自分”（7、0.45%）の順で多かった。ここから、失業者としての“自分”に対しては、ポジティブに捉えられない可能性があると考えられた。

また、“自分”については、「人物についてのポジティブ評価」が見られなかったことから、“自分”については、仕事の能力や実績、特性といった就職活動に関する要因に比べ、より根本的な要因についてポジティブに捉えにくい可能性があると考えられた。

B. 失業者に対するネガティブ評価

失業者に対するネガティブ評価は、“他人”（69、4.49%）、“身近な人”（52、3.34%）、“自分”（9、0.58%）の順に多かった。この結果から、他人と身近な人に対しては、自分に対してよりも、ネガティブな評価を抱きやすい傾向があると考えられた。

ただし、ネガティブな評価の詳細を検討すると、“他人”と“身近な人”については、「就職活動への疑問（他人:37、身近な人:31）」が「元々の能力不足（他人:32、身近な人:21）」を上回ったのに対し、“自分”については、「元々の能力不足（6）」が「就職活動への疑問（3）」を上回った。ここから、他人と身近な人については、就職活動という可変的な要因への疑問が抱かれやすいのに対して、自分については能力というより根本的な要因に対して疑問を持つ傾向が強くなると考えられた。

C. 失業による学び

失業による学びは、“自分”で多かった（114、7.31%）のに対し、“他人”（2、0.13%）と“身近な人”（7、0.45%）では殆ど見られなかった。この結果から、自分については失業によって得るものがあると捉えられている一方で、他人や身近な人に対してはそのようなイメージは抱かれにくい可能性があると考えられた。

D. 失業への対処

失業への対処は“自分”で多く（177、11.35%）、内容は「就職活動へのポジティブな取り組み（132、8.47%）」が最も多かったのに対し、“他人”（5、0.32%）と“身近な人”（9、

0.58%)では殆ど見られなかった。この結果から、自分については失業後就職活動に前向きに取り組むことを予想するが、他人や身近な人が失業へ対処するイメージは少なく、イメージに乖離があると考えられた。こうしたイメージの乖離は、失業者に対するスティグマの存在を示唆する可能性があると考えられる。ただし自分が周囲の人と協働するイメージは少なかったことから、失業者の就職活動は孤軍奮闘の孤独なイメージである可能性があると考えられた。

E. 生活の厳しさ

生活の厳しさについては、“他人” (35, 2.26%)、“自分” (15, 0.96%)、“身近な人” (4, 0.26%)の順で多かった。想定別には、“他人”では「生活の困窮 (18)」と「生活の崩壊 (17)」がほぼ同数であるものの、「生活の崩壊」内の『ホームレスのイメージ (12)』が多かったのに対し、“自分”については「生活の困窮 (9)」が「生活の崩壊 (6)」を上回り、「生活の崩壊」の中でも『家庭崩壊 (4)』が高かった。この結果から、自分と他人ではイメージに乖離があり、自分を想定すると失業者の生活は厳しくもホームレスのイメージとは直結しないものの、他人ではホームレスのイメージが強い可能性があると考えられた。

F. 社会的距離の増大・社会的関係

失業者の社会的距離の増大・社会的関係については、“他人” (72, 4.66%)、“自分” (57, 3.69%)、“身近な人” (17, 1.10%)の順で多かった。ただし、関係性によって傾向に違いが見られ、“他人”と“身近な人”では、「社会からの排除 (他人: 42, 2.72%; 身近な人15, 0.97%)」が最も多く、“他人”では、「社会と距離の増大 (24, 1.55%)」が続いたのに対して、“自分”では、「社会との距離の増大」が、39 (2.53%)と最も多く、「社会からの排除 (12, 0.78%)」が続いた。つまり、他人や身近な人を想定した場合は、「社

会からの排除」、すなわち、『再就職の困難』といった現実場面から、『失業者への蔑視』といった漠然としたものまで、失業者が排除・疎外されるというイメージが強いものに対して、自分については、『社会からの回避行動』のように失業者である自分が、自ら社会を避けるイメージが強い可能性があると考えられた。

G. 失業者への情緒的反応

失業者への情緒的反応は、“他人” (212, 13.73%)と“身近な人” (48, 3.11%)で多く、“自分”は、3 (0.19%)と少なかった。内容は、“他人”、“身近な人”の双方で「共感・同情的な理解」が大半を占め (他人: 198, 12.82%; 身近な人: 46, 2.98%)、「失業者に対するネガティブなイメージ」は少なかった (他人: 14, 0.91%; 身近な人: 2, 0.13%)のに対し、“自分”では、「共感・同情的な理解」が2 (0.13%)と少なかった。以上の結果から、他人や身近な人に対しては共感的・同情的であるものの、自分に対しては共感的に受け止められない可能性があると考えられた。

H. 失業者への対応

失業者への対応は、“他人” (145, 9.39%)と“身近な人” (121, 7.90%)で多く、“自分”は、8 (0.52%)に留まった。内容は、“他人”、“身近な人”の双方で、「失業者へのポジティブな対応」が多かった (他人: 135, 8.72%; 身近な人: 107, 6.93%)。ただし、先行研究では、失業した原因帰属によって失業政策への態度が異なる可能性が指摘されており (唐沢ら, 2010)、本研究でも、ネガティブな対応が少ないながら想起されていた点については、今後の検討が必要であると考えられた。

I. 失業者の心理

失業者の心理は、“自分”が329 (21.31%)と多く、“他人” (23, 1.49%)、“身近な人” (10, 0.65%)は少なかった。“自分”の内容は、「失

業への反応（138、8.94%）」、「自分に対するネガティブなイメージ（124、8.03%）」、「精神状態の悪化（21、1.35%）」の順に多く、自分が失業した場合は、失業への自然な反応に加え自分にネガティブなイメージを持ち、両者が相まって精神状態に影響するイメージがあると考えられた。ただし、失業者が自己イメージを低下させたり精神状態を悪化させたりするというイメージは、「失業者は自分を責めるべきだ」など失業者の罪や恥の意識を想定したある種のスティグマに繋がるイメージである可能性もあり、さらに検討が必要であると考えられた。

以上の想定別の分析結果から、失業者として他者を想定した場合には、共感的・同情的な反応が見られる一方でホームレス的なイメージがより強いなどネガティブなイメージも強いことが明らかになった。これに対して、失業者として自分を想定した場合には、失業状態から脱するために積極的に取り組む一方で、自己評価が低下するイメージがあることが示唆された。この結果から、自分が失業した場合、自身が日頃失業者に対して抱いているネガティブなイメージを失業者である自分自身に対して投影するために、自己評価が下がり、早く失業状態から脱したいと考えるのではないかと考えられる。このように失業者が自分自身に投影するスティグマはセルフ・スティグマといえるであろう。以下では、このセルフ・スティグマについてより詳しく検討するために、自分自身が失業者であると想定した場合に、周囲の人が失業者である自分に対してどのような想いを抱くと想像するかについて検討した。

(3) セルフ・スティグマに関連する要因分析

次に、3つ目のRQである失業者が自らに対して抱くスティグマ意識について検討すること

を目的に、3つ目の質問群、すなわち、Ⅱ-3で失業者として、“自分”を想定した場合について、さらに他者としてⅢ-1家族、Ⅲ-2友人、Ⅲ-3地域の人、Ⅲ-4雇用者を想定してもらい、他者が、失業者である自分に対して抱くイメージや印象、感情及び態度や行動を尋ねた質問項目に対するカテゴリをデータとして用いて分析した。

分析としては、失業者としての自分との関係性別にカテゴリのカウントを行い、関係性によるカテゴリの出現頻度や内容の傾向を分析し、失業者としての自分の意識に関連する要因を検討した。

結果と考察

自分が失業者であると想定した場合の、想定する関係性別の意識のカテゴリの総数は、876であった(結果を表2に示す)。記述数としては、“家族”(329、37.44%)、“友人”(277、31.62%)、“地域の人”(144、16.44%)、“雇用者”(127、14.50%)の順に多く、内訳としては、“家族”で、「H失業者への対処(144、13.01%)」「I失業者の心理(25、2.85%)」、「友人」で、「H失業者への対処(67、7.65%)」「G失業者への情緒的反応(41、4.68%)」、「地域の人」で、「F失業者の社会的距離・社会的関係(46、5.25%)」「G失業者への情緒的反応(35、4.11%)」、「雇用者」で、「H失業者への対処(29、3.31%)」「F失業者の社会的距離・社会的関係(25、2.85%)」の順に多かった。

A. 失業者に対するポジティブ評価

失業者へのポジティブ評価は、“家族”、“友人”、“地域の人”、“雇用者”全てで皆無であった。ここから失業した場合、自分にポジティブ評価を抱いてくれる他者は想定されていない可能性があると考えられた。

B. 失業者に対するネガティブ評価

失業者へのネガティブ評価は、“雇用者”（18、2.05%），“地域の人”（4、0.46%）の順に多く、“友人”（1、0.11%）と、“家族”では殆ど見られなかった。なお、雇用者と地域の人とでは傾向に違いが見られ、“雇用者”では、「元々の能力不足（16、1.83%）」が大半を占めたのに対し、“地域の人”では「就職活動への疑問視（3、0.34%）」が多く、評価の着眼点が異なると考えられた。

C. 失業による学び

失業による学びは、“地域の人”では記述が見られなかったものの、“家族”（3、0.34%）・“友人”（1、0.11%）・“雇用者”（1、0.11%）で、若干見られた。

D. 失業への対処

失業への対処は、“家族”（6、0.68%），“友人”（1、0.11%），“雇用者”（1、0.11%）で、若干見られた。傾向としては、“家族”・“友人”で「失業に対する生活面の対処（家族：3、0.34%）」や「就職活動へのポジティブな取り組み（家族：2、0.23%；友人、1、0.11%）」が多かったのに対して、“雇用者”では「回避的な対処」が1（0.11%）であり、家族・友人からはポジティブなイメージが予測されていると考えられた。

E. 生活の厳しさ

生活の困難は、“地域の人”が6（0.68%）と最も多く、“家族”（3、0.34%），“友人”（2、0.23%）が続いた。ただし、地域の人と家族及び友人の間では傾向に違いが見られ、“地域の人”では、「生活の崩壊（6、0.68%）」がイメージされていたのに対し、“家族”・“友人”では、「生活の困難（家族：1、0.11%；友人：0）」が「生活の崩壊（家族：2、0.23%；友人：2、0.23%）」を上回った。

F. 社会的距離の増大・社会的関係

失業者の社会的距離・社会的関係は、“地域

の人”（46、5.25%），“雇用者”（25、2.85%），“友人”（21、2.40%），“家族”（6、0.68%）の順に多く、全ての場合で、「社会からの排除」と「社会との距離の増大」がイメージされ、「社会からの孤立・疎外」は見られなかった。また、“地域の人”・“友人”・“家族”では、「社会からの排除」、すなわち、失業者が社会から疎外されるイメージが強かったのに対し、“雇用者”では、「社会との距離の増大」、すなわち、失業者が自ら社会を回避するイメージが強い傾向が見られた。

G. 失業者への情緒的反応

失業者への情緒的反応は、“友人”（41、4.68%），“地域の人”（36、4.11%），“雇用者”（10、1.14%），“家族”（7、0.80%）の順に多く、全ての場合で、「共感・同情的な理解（友人：29、3.31%；地域の人：27、3.08%；雇用者、6、0.68%；家族、6、0.68%）」がネガティブな反応を上回った。ここから、失業者への情緒的反応は、どの対象からも共感・同情的なものが多く想定されていると考えられた。

H. 失業者への対応

失業者への対応は、“家族”、“友人”では、「失業者へのポジティブな対応（家族：82、9.36%；友人：63、7.19%）」が「失業者へのネガティブな対応（家族：32、3.65%；友人：4、0.46%）」を上回ったのに対して、“地域の人”、“雇用者”では、「失業者へのネガティブな対応（地域の人：23、2.63%；雇用者：19、2.17%）」が、「失業者へのポジティブな対応」を上回った。ここから、家族や友人からはポジティブな対応が予測されているものの、地域や就職活動においては、厳しい評価やネガティブな対応が予測されていると考えられた。これらは、高橋（2010）の失業者が「社会の目」を内在化するという指摘と一致する結果であり、失業者の心理的困難の一要因である可能性が考えられた。

I. 失業者の心理

失業者の心理は、“家族”（25、2.85%）、“雇用者”（23、2.63%）、“友人”（17、1.94%）の順に多かった。ただし、“家族”と“友人”では「失業への反応（家族：22、2.51%；友人：15、1.71%）」が大半を占めたのに対して、“雇

用者”では「自分に対するネガティブなイメージ（12、1.37%）」が「失業への反応（10、1.14%）」を上回った。ここから、家族や友人と雇用者との間では、失業者の心理についてイメージに差があり、雇用者はよりネガティブなイメージを抱いていることが想定されていると考えられた。

表2 自分に対する想定する他者別の失業者に対する意識

	家族		友人		地域の人		雇用者		合計	
	記述数	%	記述数	%	記述数	%	記述数	%	記述数	%
A 失業者へのポジティブ評価	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
A-1人物に対するポジティブ評価	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
A-2就職活動のポジティブ評価	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
B 失業者へのネガティブ評価	0	0.00	1	0.11	4	0.46	18	2.05	23	2.63
B-1元々の能力不足	0	0.00	0	0.00	1	0.11	16	1.83	17	1.94
B-2就職活動への疑問	0	0.00	1	0.11	3	0.34	2	0.23	6	0.68
C 失業による学び	3	0.34	1	0.11	0	0.00	1	0.11	5	0.57
C-1弱者の支援の獲得	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
C-2思索の深まり	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
C-3失業の積極的な意味付け	3	0.34	1	0.11	0	0.00	1	0.11	5	0.57
D 失業への対処	6	0.68	1	0.11	0	0.00	1	0.11	8	0.91
D-1失業の困難への対処	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
D-2失業に対する生活面の対処	3	0.34	1	0.11	0	0.00	0	0.00	4	0.46
D-3就職活動へのポジティブな取り組み	2	0.23	0	0.00	0	0.00	0	0.00	2	0.23
D-4周囲の人との協働	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
D-5回避的な対処	1	0.11	0	0.00	0	0.00	1	0.11	2	0.23
E 生活の厳しさ	3	0.34	2	0.23	6	0.68	0	0.00	11	1.26
E-1生活の困窮	2	0.23	2	0.23	0	0.00	0	0.00	4	0.46
E-2生活の崩壊	1	0.11	0	0.00	6	0.68	0	0.00	7	0.80
F 失業者の社会的距離・社会的関係	6	0.68	21	2.40	46	5.25	25	2.85	98	11.19
F-1社会との距離の増大	2	0.23	5	0.57	15	1.71	14	1.60	36	4.11
F-2社会からの排除	4	0.46	16	1.83	31	3.54	11	1.26	62	7.08
F-3社会からの孤立・疎外	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
G 失業者への情緒的反応	7	0.80	41	4.68	36	4.11	10	1.14	94	10.73
G-1共感・同情的な理解	6	0.68	29	3.31	27	3.08	6	0.68	68	7.76
G-2失業者に対するネガティブなイメージ	1	0.11	12	1.37	9	1.03	4	0.46	26	2.97
H 失業者への対処	114	13.01	67	7.65	31	3.54	29	3.31	241	27.51
H-1失業者へのポジティブな対処	82	9.36	63	7.19	8	0.91	10	1.14	163	18.61
H-2失業者へのネガティブな対応	32	3.65	4	0.46	23	2.63	19	2.17	78	8.90
H-3サポートについて	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
I 失業者の心理	25	2.85	17	1.94	5	0.57	23	2.63	70	7.99
I-1失業への反応	22	2.51	15	1.71	2	0.23	10	1.14	49	5.59
I-2自分に対するネガティブなイメージ	2	0.23	1	0.11	3	0.34	12	1.37	18	2.05
I-3精神状態の悪化	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
I-4楽観視	1	0.11	1	0.11	0	0.00	1	0.11	3	0.34
合計	328	37.44	277	31.62	144	16.44	127	14.50	876	100.00

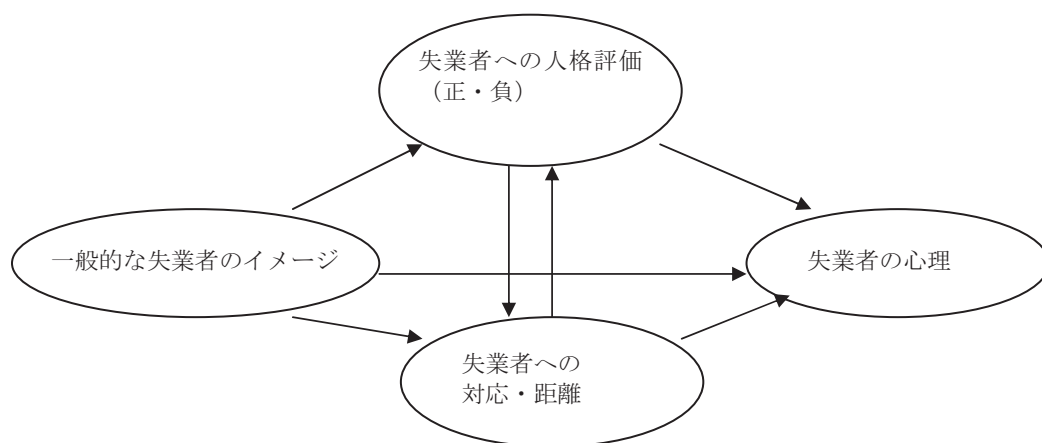
総合的考察

本研究は、失業者に対する意識の実態を明らかにすることを目的として、（1）一般に失業者についてどのようなイメージや印象、意識が抱かれているのか、（2）想定する失業者との関係性によって、失業者に対してどのような意識が抱かれているのか、（3）自分を失業者として想定した場合に、他者が自分にどのような意識を抱くと考えられているのか、の3つをRQとして、検討した。

失業者に対する意識の内容と構造

RQ 1に基づく検討の結果、失業者に対する意識は、ポジティブなものからネガティブなものまで9つに分類され、両面的であることが示唆された。9つの大カテゴリをさらにまとめると、失業者に対するイメージは、図1に示すように、4つのクラスターにまとめられ、各々のクラスターには相互に一定の関係性があると考えられる。すなわち、失業者に対しては、カテゴリC・カテゴリD・カテゴリE・カテゴリFに見られた、生活の厳しさや社会との距離、失

図1 失業者へのイメージの構造



業による学びと失業への対処といった「一般的な失業者」というイメージが抱かれている。そして、そのような「一般的な失業者」イメージから、「失業者への人格評価（正・負）」、すなわち、カテゴリ A・カテゴリ Bに見られた、失業者の現状や能力・実績への評価がなされたり、「失業者への対応・距離」、すなわち、カテゴリ G・カテゴリ Hに見られた失業者への情緒的反応や対応のあり方が影響を受けたりしている。一方で、「失業者への人格評価（正・負）」と「失業者への対応・距離」は相互に関連し、最終的には、「一般的な失業者のイメージ」や「失業者への人格評価（正・負）」「失業者への対応・距離」は、カテゴリ Iに見られた「失業者の心理」に影響すると考えられたのである。まとめると、失業者に対しては、「一般的な失業者のイメージ」が抱かれているのに加え、それをもとにした評価や対応がなされ、最終的に失業者の心理に影響している可能性があると考えられた。

こうした失業者へのイメージの関係性を、失業者が自分自身に対して抱く意識に当てはめるならば、失業者は、自身が持つ失業者イメージによって、自己評価を低下させたり、周囲に引け目を感じ距離を置くなどして、心理的困難に

陥る可能性があると考えられた。ただし、カテゴリ Cに見られた「失業による学び」のように、失業をむしろ学びの機会と捉えるイメージや、カテゴリ Dの「失業への対処」のように、失業者が失業を脱するため積極的に取り組むイメージは、本人と周囲のスティグマを和げる可能性があると考えられた。

想定別の失業者に対する意識

RQ 2に基づく検討の結果、失業者に対する意識は、失業者との関係性によって多様であることが示唆された。具体的には、自分を想定した場合は、自分に対してネガティブな評価を行い、自ら社会と距離を取るイメージが強いものの、必死に活動しているというイメージも強く、総括すると、精神的にダメージを受けながらも積極的に失業に対処するイメージであると考えられた。一方、身近な人や他人を想定した場合には、共感・同情的な反応やポジティブな対応が多いものの、ホームレスのイメージや社会から排除・疎外されたイメージも強く、こうしたネガティブとポジティブなイメージの双方が、失業者や自らが失業した場合の実際の対応や反応にどのように反映されるかを検討する必要があると考えられた。

セルフ・スティグマに関連する失業者に対する意識

RQ 3に基づく検討の結果、自分を失業者として想定した場合に、他者が失業者としての自分に抱く意識の傾向は、関係性によって以下の傾向があることが示唆された。

すなわち、雇用者と地域の人からは、仕事の能力や、就職活動への取り組み方といった、仕事や生活面で、ネガティブな評価が予測されていた。雇用者は、失業者を能力のないものとしてみなすことがあること (Gallie, 1994) や、失業期間の長さを望ましくないとすることが指摘されている (Oberholzer-Gee, 2008)。本研究の結果は、このような先行研究と整合性があり、むしろ失業者自身が雇用者から受ける失業体験についてのネガティブ評価を予測していると考えられた。また、地域の人については、失業者や求職活動が実らない失業者は、周囲から見下されることもあることが指摘されており (Rantakeisu, et al., 1997)、本研究では、失業者自身が地域の人からの白い目などの冷やかかイメージを予想していると考えられた。

一方、友人からは、ポジティブな対応や反応のイメージが多かったのに対して、家族からは、ポジティブ・ネガティブ双方のイメージが抱かれていた。より失業者に近い家族は、失業の影響を直に受けるとともに、失業者へのサポートの担い手となる可能性が高い。RQ 2に基づく分析の結果、家族や友人といった身近な人が失業した場合には、共感・同情的な反応が多かったことは、家族は、失業者に対してより批判的な態度が低い (Furaker and Blomsterberg, 2003) という先行研究と一致する。ただし、先行研究では、特に短期間失業している女性よりも、長期間失業している男性の方が恥を感じる傾向が強いことと、男性が伝統的に家計を支える役割を担っていることとの関連性が指摘され

ている (Furaker and Blomsterberg, 2003)。RQ 3に基づく分析の結果、自分が失業したと想定した場合に家族からのポジティブ・ネガティブな反応の双方が予測されたこととあわせて考えると、失業者は、家族の実際の反応によらず、自分自身が抱く意識によって、心理的に困難を抱える可能性があると考えられた。

本研究の結果、失業者の抱える困難には、社会的・文化的背景に基づく、内在化された「社会の目」とも言える意識が関係している可能性が示された。この結果から、失業者への支援にあたっては、失業者が抱く内面の社会規範や価値観までも視野にいれる必要があると考えられた。

今後の課題

本研究の結果、対象を特定しない場合には、失業者については9つという多様な視点からイメージを抱くことが示唆された。本研究は、どのような関係性の人を失業者としてイメージするのかによって失業者に対する意識が大きく異なることを明らかにしたと考えられる。しかしながら、例えば、バブル崩壊後には中高年の失業者が話題となったが、昨今ではむしろ若年層のフリーターや新卒者の未就労など、失業者にも様々な形態がある。したがって、現代の人は、失業者としてそもそもどのような人をイメージするのかについて把握し、失業者との意識や対応との関連を検討することが今後の課題であると考えられる。

また、Furaker and Blomsterberg (2003) は、失業者との距離が意識に影響する可能性を示している。本研究の対象者の多くは女子大学生であり、失業や就業の経験がないことも失業者との距離に影響している可能性があるだろう。どのような接触がスティグマを緩和するかについても検討の必要がある。今後はこうした失業者との距離や接触の内容にも着目し、失業者への

意識について検討する必要があると考えられた。

引用文献

Crocker, J., Major, B. and Steele, C. 1998 Social stigma, “Gilbert, S. T., Fiske, S.T, and Lidzey, G. (Eds) Handbook of social psychology. McGraw-Hill, 504-553.

Dovidio, J. F., Major, B., and Crocker, J. Stigma: Introduction and overview, “The Social Psychology of Stigma” The Guilford Press 2000

Furaker, B., and Blomsterberg, M. 2003 Attitudes towards the unemployed. An analysis of Swedish survey data International journal of social welfare, 12, 193-203.

D Gallie, C Marsh, CM Vogler - 1994 -Social change and the experience of unemployment Oxford Univ Pr on Demand
Goffman, E., 1963 “Stigma: Note on the management of spoiled identity” Prentice-Hall,

Jones, E. E., Farina, A, Hastorf, A. H., Markus, H., Miller, D. T., and Scott, R. A., “Social stigma” the psychology of marked relationships Freeman 1984.

唐沢かおり、大高瑞郁、竹内真純 2010 中高年齢者の失業に対する政策への態度規定要因：原因帰属の観点からのアプローチ 社会心理学研究 25 178-187

川喜田二郎 1970 続・発想法：KJ法の展開と応用. 中公新書

Oberholzer-gee, F., 2008 Nonemployment stigma as rational herding: A field experience. Journal of economic behavior and organization, 65, 30-40.

Rantakeisu, U., Starrin, B. and Hagquist, C.,

1997 Unemployment, shame and ill health – Exploratory study Scandinavian journal of social welfare, 13-23.

下津咲絵、堀川直史、坂本真士、坂野雄二 (2005) 統合失調症におけるセルフスティグマとその対応、精神科治療学、20 (5) 471-475.

高橋美保 2008 日本の中高年男性の失業における困難さ：会社及び社会との繋がりに注目して 発達心理学研究 19 (2) 132-143

高橋美保 2010 中高年の失業体験と心理的援助—失業者を社会につなぐために。ミネルヴァ書房

付記) なお、本研究は、平成21年度科学研究費補助金(若手スタートアップ(課題番号: 21830032)の交付を受けて実施されました。